

B ドジョウ種苗量産試験

I 調査目的

ドジョウ養殖に必要な種苗を人為的に安定量産する方法を見出し養殖の確立化をはかる。

II 調査内容

1. 試験期間；昭和48年6月～48年11月
2. 試験場所；黒石養魚場
3. 担当者；淡水養殖課

主任研究員 青 山 禎 夫
技 師 原 口 健 二
黒石養魚場
技 師 鈴 木 史 紀

4. 試験項目

- (1) 種苗生産試験
- (2) 魚体測定調査

5. 試験方法

(1) 種苗生産試験

硬質ビニール板で仕切った一面176 m^2 の水田9面に、1面あたり100尾の雌と300尾の雄親魚を放流し、天然産卵によって得られた稚魚を種苗化出来るまでに養成した。

餌料は天然で発生するもののほか、コイ用ペレット150 g、魚粉100 gを各池に毎日与えた。

(2) 魚体測定調査

放流稚魚および生産稚魚の魚体測定を実施した。

III 調査結果

1. 種苗生産試験

放流魚および生産稚魚の概況は第1表のとおりで、9面の水田利用池で合計18.05 kg (約15,000尾)の稚魚ドジョウを生産することができた。

これらの稚魚は魚体測定項目(後記)でも示すとおり、養殖用種苗として充分使用出来るサイズのものである。

しかし、天然の生産力を活用するという用途は達したものの、その生産量は期待した数量までには至らなかった。

2. 魚体測定調査

稚魚生産用に放流した親魚の測定結果を第2表に、生産された稚魚の測定結果を第3表に示した。

生産稚魚は平均全長が6.64 cm(2回測定の平均値)で養殖用の種苗として使用出来る大きさであった。

IV 試験の成果および今後の課題

天然の生産力を利用して養殖用種苗を生産することができたが、生産量は低水準にとどまった。

今後は天然生産力だけでなく積極的な給餌を施し、生産力を高めながら稚魚を量産するための検討が必要と思われる。

第 1 表 親魚放流、稚魚取り上げ数量

池NO	親魚放流	生産稚魚取り上げ						
	年月日 48. 6. 26	48. 10. 17	48. 10. 18	48. 10. 20	48. 10. 21	48. 10. 22	48. 11. 7	計
1	♀:100尾 (1.672kg) ♂:300尾 (0.75kg)	kg 1.2	kg 0.3	kg 0	kg 0.3	kg 0.05	kg 0.1	kg 1.95
2	"	1.0	0.2	0	0.1	0.1	0.1	1.5
3	"	0.7	0.8	0	0.1	0.05	0.1	1.75
4	"	1.1	0.3	0	0.1	0	0.3	1.8
5	"	1.1	0.7	0	0.2	0	0.0	2.0
6	"	1.0	0.6	0.3	0.1	0.1	0.7	2.8
7	"	1.3	0.5	0.2	0.0	0.1	0	2.1
8	"	1.2	0.5	0	0	0	0.1	1.8
9	"	1.7	0.2	0	0.3	0.05	0.1	2.35
計	♀:900尾 ♂:2700尾	10.3	4.1	0.5	1.2	0.45	1.5	18.05

第 2 表 放流親魚測定表

雌雄別	放流年月日	全 長 (cm)		体 重 (g)		測定尾数 (尾)
		範 囲	平 均	範 囲	平 均	
♀	48.6.26	11.8 ~ 16.9	15.42	9.1 ~ 27.1	16.72	20
♂	"	6.6 ~ 9.4	8.38	1.6 ~ 4.0	2.5	20

第 3 表 生産稚魚測定表

測 定 年 月 日	全 長 (cm)		体 重 (g)		測定尾数 (尾)
	範 囲	平 均	範 囲	平 均	
48. 10. 19	5.3 ~ 7.3	6.82	0.6 ~ 1.4	1.11	30
48. 10. 22	5.0 ~ 12.2	6.46	0.6 ~ 7.6	1.32	21